関東地方の周年行事から学ぶ 負の記憶を継承する要因に関する研究

千葉科学大学　教授　藤本一雄

概要：

自然災害・感染症流行を起源として 100 年以上にわたり実施されている周年行事の実態を把握するため、東北・関東・中部地方の市区町村 857 団体を対象として質問紙調査を行い、515 団体から回答を得た。その結果を受けて、文献調査を行い、自然災害を起源とする行事に関しては、地震、津波、洪水、噴火、火災を起源とする行事の存在を、感染症流行を起源とする行事として、防疫活動中に亡くなった者を慰霊するための行事や悪疫退散を祈願するために始められ行事の存在を確認した。これらの結果を踏まえて、11 地域を訪問して周年行事に関する聞き取り調査を行った。その結果、周年行事が長く続けられている要因として、「日常化の工夫」、「ハードとソフトの組み合わせ」、「恒久的な団体・組織」、「他団体・組織との連携」、「自然に対する畏敬の念」、「主催者の熱意・リーダーシップ」、「行事の観光資源・メディア化」、「娯楽・交流の機会」であることを明らかにした。

キーワード: 周年行事、負の記憶、自然災害、感染症、災害伝承

１．はじめに

災害の記憶を長年にわたって伝承することは重要とされている[1)~3)]。その一方で、災害の記憶を長期にわたり継承することは困難であるとの指摘もある[4),5)]。災害の記憶を長期にわたって伝承する方法の一つとして、石碑がある。例えば、東日本大震災以降、津波災害に関する石碑の情報が調査されたり[6)]、平成 30 年 7 月豪雨の教訓を踏まえて「自然災害伝承碑」の地図記号が制定されたりしている[7)]。ただし、これらの事例は、自然災害を伝承する石碑等に遺された過去からの貴重な教訓が活用されなかった(忘れ去られていた)ことが問題視されたことをきっかけとして始められた取り組みである。このことは、「石碑は耐久性があることから伝承の有力な媒体であるものの、地域の人が管理しないとその存在すら忘れ去られ、放置されることがあり得る」[8)]との指摘とも符合する。このように、災害の記憶を「もの」だけで伝承することには限界があると言えよう。その一方で、自然災害・感染症流行に関する負の記憶が、100 年以上にわたり「行事」として伝承され続けている事例もある。例えば、自然災害に関しては、長崎県長崎市山川河内地区において、1860 年の土砂災害で 33 名の犠牲者が出たことをきっかけとして、150 年以上にわたり「念仏講まんじゅう配り」が月命日(毎月 14 日)に行われている[8)]。また、疫病流行に関しては、愛知県の田原警察署では、1886 年に流行したコレラの防疫活動中に殉職した警察官を慰霊する行事を、2020 年に 133 回忌として執り行っている[9)]。しかし、このような行事については、行事ごとに紹介している事例はあるものの、網羅的に調査した事例は見当たらない。自然災害・疫病流行の記憶を「行事」によって長年にわたり継承している事例から、継承し続けることができた要因を明らかにすることができれば、今後、地域の「負の記憶」を次世代に継承していく上での有用な知見が得られるものと考えられる。

以上を踏まえて本研究では、自然災害・感染症流行を起源として始まった行事のうち100年以上にわたり継続して実施されている周年行事を対象として、質問紙調査、文献調査、聞き取り調査を行い、これらの結果を踏まえて、長年にわたり行事が継承され続けてきた要因を明らかにすることを目的とする。

２．質問紙調査の方法・結果

まず、東北地方、関東地方、中部地方(甲信、北陸、東海)の市区町村教育委員会(857 団体)の文化財保護担当部署を対象として、100 年以上にわたって継続している自然災害・感染症流行を起源とする周年行事の情報提供に関する質問紙調査を実施した。内訳は、東北地方 : 227 団体、関東地方 : 316 団体、中部地方 : 314 団体である。質問紙の内容は、まず、100 年以上にわたり継続している周年行事の有無について尋ねて、「ある」との回答の場合には、その周年

行事の名称、起源となった災害・疫病名、発生年、周年行事について記載されている文献名をそれぞれ回答してもらう形式とした。

質問紙を 2023 年 3 月下旬に郵送し、回答期限を 2023 年 5 月 24 日までと設定し、515 団体からの回答が得られた（回収率：60.1%）。地方別の回収率は、東北地方：56.8%(=129/227)、関東地方：61.7%(=195/316)、中部地方：60.8%(=191/314)であった。100 年以上にわたり継続している周年行事の有無について尋ねた結果、「ある」が 23.9%(123 団体)、「ない」が 64.9%（334 団体）、「知らない・わからない」が 11.3%（58 団体）であった。地方別での「ある」の回答割合は、東北地方：17.8%（=23/129）、関東地方：23.1%（=45/195）、中部地方：28.8%（=55/191）であった。

３．文献調査の方法・結果

つぎに、質問紙に文献名が記入されていた周年行事について、国立国会図書館、都道府県・市町村の公立図書館を通じて文献複写による取り寄せを行った。自然災害を起源とする行事に関しては、地震、津波、洪水、噴火、火災を起源する行事の存在を確認できた。これらの行事の一部を以下に示す。

・富山県立山町：1858 年飛越地震で生じた堰止湖が、余震により二度決壊した。二度の洪水で旧大森村まで移動した巨石(西大森の大転石)により濁流の流れが変わり、西大森は洪水の被害を免れた。これに感謝するため「水神様の祭り」が毎年 4 月 25 日に行われている。

・千葉県銚子市：「式年銚子大神幸祭」は、1102 年、銚子・高見浦の津波を鎮めるため、堀河天皇が勅命を下し、銚子への御神幸祭が 1102 年に初めて斎行された。この神幸祭は、東大社(東庄町)、雷神社(旭市)、豊玉姫神社(香取市)の三社の神輿が銚子に渡御するものであり、第 1～9 回までは毎年行われたが、第 10 回からは 20 年ごとに行われている。近年では、2010 年 4 月に第 54 回神幸祭が行われた。

・千葉県長生村：1703 年元禄地震の津波により一松郷で 700 人以上の犠牲者が出た。その霊を弔うため、本興寺の境内には、村内の犠牲者全員の法名を記した大位牌が安置されている。また、1952 年に 250 回忌の供養塔が、2002 年には 300 回忌の供養塔がそれぞれ建立された。

・静岡県伊東市：佛現寺の境内には、1703 年元禄地震、1923 年関東大震災の供養碑が建立されており、その供養祭が毎年、玖須美区の関係者らが集まり、供養碑前で営まれる。2023 年は 9 月 2 日、第 44 回の供養祭が営まれた。

・千葉県船橋市：1746 年の津波で溺死した漁師・住民を供養するため釈迦如来坐像(石像)が建立された。1824 年、漁場をめぐる争いから漁民 2 名が命を落とした。これら犠牲者の霊を弔うため、1825 年から「大仏追善供養」が毎年 2 月 28 日に行われるようになった。

・福井県勝山市：1726 年の女神川の氾濫による犠牲者(猪野口村で 53 戸のうち 48 戸が流出)を供養するため、毎年 4 月に「女神川水害永代講」を行っている。1825 年には百回忌の供養碑が、1925 年には二百回忌の供養碑がそれぞれ建立された。近々、三百回忌(2025 年)の供養碑を建立する計画もある。

・静岡県川根本町：「平谷の流したい(焚)」(毎年 7 月 14 日)は、青竹と麦わらを束ねた上に松明を立てて大井川へ流す行事である。1828 年の大洪水が生じた際、疫病の犠牲者の霊を慰めるため、愛知県の津島神社に流灯をささげたのが始まりとされる。

・富山県滑川市：本江(郷側左岸)の集落は洪水被害を受けやすく、1835 年の郷川の氾濫によって耕地が荒廃した。その後、宝田宗兵衛の尽力により、集落 48 軒が転居できたことに感謝するための「転地講」(毎年 7 月 27 日)が 1842 年から始められた。

・群馬県嬬恋村：1783 年浅間山噴火の土石なだれにより、鎌原村民 570 名のうち 477 名が犠牲となったことをきっかけとして、鎌原地区で供養祭が毎年 8 月 5 日に行われている。最近では、2023 年に「浅間押し 240 周年追悼式」が行われている。

また、感染症流行を起源とする行事としては、防疫活動中に亡くなった者を慰霊するための行事や悪疫退散を祈願するために始められた行事の存在を確認できた。これらの行事の一部を以下に示す。

・千葉県鴨川市：1877 年にコレラが流行した際、医師・沼野玄昌が防疫のために患者を隔離し、患者の家の井戸を石灰で消毒していたのを、患者の生き胆を抜き、井戸に毒を入れているという噂が流れ、それを妄信した住民らによって玄昌は殺害された。1978 年、鴨川保健所や長狭地域の医師有志によって、烈医沼野玄昌先生弔魂碑が建立されるとともに、烈医沼野玄昌先生百年忌記念行事が執り行われた。

・愛知県田原市：1886 年に流行したコレラの防疫活動の際、愛知県警豊橋署田原分署の江崎邦助巡査(25 歳)がコレラに感染し 6 月 23 日に殉職し、その看病にあたっていた妻じう(19 歳)も感染し 6 月 26 日に亡くなった。田原警察署による慰霊墓参(毎年 6 月 23 日)、江崎巡査夫妻偉績顕彰会(事務局：田原市社会福祉協議会)による追悼法要、田原市立小学校(児童)による江崎巡査夫妻の功績を題材にした演劇の上演が行われている。

・埼玉県ときがわ町：天明の大飢饉(1782～1788 年)により疫病が流行し、村内の戸数が激減した。悪疫退散を祈念して、信州で行われていた送神祭を取り入れて「大野の送神祭」が始まったといわれている。当初は 4 月 8 日に行われていたが、現在は 4 月の第二日曜日に行われている。

・岐阜県瑞浪市：文久年間(1861～1864 年)、奥名地区に原因不明の高熱が出る疫病が流行し、死者が絶えなかったことから「奥名大般若会」が毎年 1 月 28 日に行われるようになった。2011 年の時点で 148 回の継続が確認されて

いる。

・山形県酒田市：1878 年の前 2～3 年の間、天然痘の流行、大風、大洪水、ウンカの大発生が続き、これらの災禍で意気消沈した人びとを奮い起こすために「木川神楽」が始まった。

・山梨県富士河口湖町：1920 年頃、長浜で腸チフスや赤痢が流行したため、易者に見立てを願ったところ無縁仏の祟りに起因すると出たことから、供養塔を建立するとともに、東光寺の住職による「ホウエンサマ」の法要を毎年営むところとなった。

その他に、100 年近く継続している行事、発生年が不明であるが続けられている行事、途絶してしまった行事、途絶した後に再開した行事、最近になって始められた行事などの存在も確認することができた。

４．聞き取り調査の方法・結果

自然災害・感染症流行の発生年がある程度明らかな行事のうち、概ね 100 年以上にわたり続けられている行事として、11 地域で実施されている周年行事を対象として聞き取り調査を行った。

1) 千葉県長生村：元禄関東地震の津波犠牲者の慰霊行事
2) 福井県勝山市猪野口地区：「女神川水害永代講」
3) 静岡県伊東市玖須美区：元禄・大正関東地震の津波犠牲者の供養祭
4) 富山県立山町西大森地区：「水神様の祭り」
5) 岐阜県中津川市：四ツ目川災害に関する行事
6) 千葉県船橋市：「大仏追善供養」
7) 群馬県嬬恋村：天明浅間山噴火の犠牲者の供養祭
8) 千葉県銚子市：「式年銚子大神幸祭」
9) 愛知県田原市：江崎邦助巡査夫妻の慰霊行事
10) 富山県滑川市本江地区：「転地講」
11) 静岡県川根本町平谷地区：「平谷の流し焚」

これらの行事の関係者に電話連絡等をして聞き取り調査への協力を依頼・承諾を得た後、事前に質問事項を送付しておき、現地訪問日には半構造化インタビューによる聞き取り調査を行った。事前に送付した質問項目は、行事が始まったきっかけ、行事の実施主体・参加者、費用負担、周年行事が長く継続している理由、次回（来年度）の行事予定、今後の周年行事の実施する上での困っていること、などである。

なお、石川県輪島市の「波よけ地蔵様祭り」は令和 6 年能登半島地震が発生したため、千葉県鴨川市の医師・沼野玄昌に関する慰霊行事に関しては当時を知る関係者が見つからなかったため、それぞれ聞き取り調査を断念した。

５．考察

第 4 章の「周年行事が長く継続している理由」に対する回答を整理した結果、行事が長く継続する要因として、「日常化の工夫」、「ハードとソフトの組み合わせ」、「恒久的な団体・組織」、「他団体・組織との連携」、「自然に対する畏敬の念」、「主催者の熱意・リーダーシップ」、「行事の観光資源・メディア化」、「娯楽・交流の機会」に分類できた。

「日常化の工夫」に関して、本興寺(千葉県長生村)の場合は、本堂内に津波犠牲者の大位牌が安置されており、追善供養が毎日行われていた。女神川水害永代講を行っている猪野口地区(福井県勝山市)では、犠牲者を供養する碑が村人の居住する場所から農作業を行う田畑に向かう道筋に設置されており、毎日拝むことが習慣化していた。大仏追善供養を執り行う不動院(千葉県船橋市)では、大仏が通りの方向を向き、目に触れやすい参道の入口近くに設置されていた。また、聞き取り調査での意見としては上がらなかったが、江崎邦助巡査夫妻の慰霊墓参を毎年行っている田原警察署では、警察署ロビーに江崎巡査の功績を紹介する大きなアクリル画が展示されていた。関連して、20 年に一度の行事である式年銚子大神幸祭に関しては、その間に小規模な行事(2 年に一度の「桜井神幸祭」)を行っている。このように、自然災害・感染症流行といった滅多に発生しない事象に関する負の記憶を、日常化(高頻度化)するような工夫がなされていた。

「ハードとソフトの組み合わせ」に関しては、猪野口地区(福井県勝山市)においては、水害の言い伝え(ソフト)だけでなく、供養碑(ハード)があったことを長く続く要因の一つとしてあげていた。本興寺(千葉県長生村)においても、大位牌が本堂内の目に触れる場所に安置されていることによって忘れることがない(寺以外の場所や屋外に設置されていた場合は忘れ去られていたかもしれない)と述べている。これらのことから、自然災害・感染症流行の負の記憶を長きにわたり継承していくためには、ハード(石碑など)だけでも、また、ソフト(言い伝え、行事など)だけでも十分ではなく、ハードとソフトの両方を組み合わせて伝承することが必要と言えそうである。

「恒久的な団体・組織」に関しては、警察（田原警察署による慰霊墓参）、漁業協同組合(船橋市漁業協同組合による大仏追善供養)など、恒久的な団体・組織が行事の主催者であることが長く継続する要因の一つとして挙げられていた。恒久的な団体・組織の一つと考えられる「学校」については、衣笠小学校（愛知県田原市）においても、毎年の恒例行事として、江崎巡査に関する演劇が上演されていた。しかし、同じ「学校」であっても、「平谷の流し焚」に関しては、平谷地区付近の中川根小学校の児童が約 20 年前から行事に参加していたが、少子化の影響を受けて同校が令和 4 年に廃校となり、離れた場所の小学校に統合されたため、今後の児童の参加は期待できないとのことであった。このように、恒久的な団体・組織が存続する限りは、

周年行事も継続される可能性はあるものの、今後の少子化・人口減少の影響によって団体・組織の消滅・解散とともに行事が途絶えることが予想される。

「他団体・組織との連携」に関しては、四ツ目川災害に関する行事を行っている岐阜県中津川市では、中津地区災害対策協議会を発足させるとともに、同協議会に関係する団体・組織から人的・経済的な支援を受けていた。愛知県田原市では、衣笠小学校の児童が田原警察署を訪問してアクリル画を見学する一方で、田原警察署の署員が衣笠小学校に出向いて授業を行っていた。また、聞き取り調査での意見としてはあがらなかったが、式年銚子大神幸祭は、３つの神社の協力体制のもと神輿が銚子に向けて運ばれ、その道中に設置された関所ごとに地域住民が奉納芸能を披露するといった協力も得ながら行われていた。このように、１つの団体・組織だけで周年行事を行うよりも、多くの団体・組織との連携・協力体制を築いて行事に取り組むことが長く継続する要因の一つとなっていると考えられる。

農業や漁業を生業としている地域を中心として、「自然に対する畏敬の念」があげられていた。「平谷の流し焚」を行っている平谷地区(静岡県川根本町)では川根茶の生産を、「大仏追善供養」を行っている船橋市漁業協同組合(千葉県船橋市)では行業をそれぞれ生業としている。また、富山県立山町西大森地区、群馬県嬬恋村鎌原地区、富山県滑川市本江地区においては、生活する場の近くに自然の脅威(河川、火山)があるが、その一方で、これらの自然から恩恵も受けているとの意見もあがっていた。これらの地域では、生活の場と仕事(農業、漁業など)の場が近接していることから、自然の脅威と恩恵の両面を実体験として感じやすいことが、行事が長く続けられる要因になっていたものと推察される。ただし、近年サラリーマン化が進行し、生活の場と仕事の場が離れているケースが増えており、今後、これらの地域において周年行事が途絶える可能性が危惧される。

「主催者の熱意・リーダーシップ」に関しては、女神川水害永代講を行っている猪野口地区では庄屋(区長)のリーダーシップを、四ツ目川災害に関する行事の主催者である中津地区災害対策協議会では前・会長の熱意をあげていた。このように、行事を主催する団体・組織における特定の人物の熱意・リーダーシップが、行事を長く続ける要因の一つになっているケースもみられた。ただし、その人物の熱意・リーダーシップを次の世代へとうまく継承できるかどうかが、周年行事を継続していく上で大きく影響するものと考えられる。

「行事の観光資源・メディア化」に関しては、群馬県嬬恋村鎌原地区では災害遺構を見るために観光客が訪れたり、周年行事がメディアで取り上げられたりすることを、愛知県田原市では田原警察署による慰霊墓参が新聞記事で取り上げられることを、周年行事が長く続く要因の一つとしてあげていた。その一方で、船橋市漁業協同組合では、大仏追善供養に関して「ごはんを大仏につける所作がありますが、これが奇異にうつるためか見学する部外者(一般者)がおり、供養行事というより観光的な側面を感じる」と、周年行事の観光資源化に対してやや否定的な印象を持つ場合もあることに留意する必要があると言える。

「娯楽・交流の機会」に関しては、式年銚子大神幸祭においては「芸能を見物・参加できる楽しみ(娯楽が少ない時代だった)」や「銚子の人も楽しみにしていたのではないか」との考えが述べられた。平谷の流し焚においも「若い女性たちを喜ばせようと、平谷の男性らは張り切って、大きい「焚」を作ったり、火の粉を浴びながら勇壮な姿を見せたりしようとした。当時、最大のレクリエーション（楽しみ）の一つでもあった」と述べられている。また、群馬県嬬恋村の「念仏講、奉仕会は、人が集まってきて情報交換をする場にもなっている」、富山県滑川市の「転地講に参加すると、以前は子どもたちにお菓子を配っていたが、最近では参加する子どもが少なくなった」のように、世代を超えた交流の機会としても機能していたようである。このように、慰霊・供養といった位置づけでの行事としてだけでなく、当該行事に娯楽・交流に関する要素が加わることが、周年行事を長く続ける要因の一つと言えそうである。

６．結論

本研究では、自然災害・感染症流行を起源とする周年行事が長く継続して実施される要因を明らかにすることを目的として、関東・東北・中部地方の行事を対象として、質問紙調査、文献調査、聞き取り調査を行った。その結果、周年行事が長く継続する要因は、「日常化の工夫」、「ハードとソフトの組み合わせ」、「恒久的な団体・組織」、「他団体・組織との連携」、「自然に対する畏敬の念」、「主催者の熱意・リーダーシップ」、「行事の観光資源・メディア化」、「娯楽・交流の機会」であることを明らかにした。

参考文献

1) 佐藤翔輔：発生から 50 年を迎えた「災害の記憶」の現状把握と災害・防災教育の試み－1964 年新潟地震をテーマにした小学生対象の出前授業から－, 自然災害科学, 35(1), pp.29-38, 2016.
2) 日本災害情報学会編：災害情報学事典, 朝倉書店, 2016.
3) 武田文男・竹内 潔・水山高久：地方自治体における災害教訓伝承の取り組みに関する研究, GRIPS Discussion Paper 17-02, 2017.
4) 藤森立男・矢守克也編：復興と支援の災害心理学, 福村出版, 2012.
5) 首藤伸夫：記憶の持続性－災害文化の継承に関連して－, 津波工学研究報告, No. 25, pp.175- 184, 2008.
6) 国土交通省東北地方整備局："津波被害・津波石碑情報アーカイブ". http://www.thr.mlit.go.jp/road/sekihijouhou/, (閲覧 2023 年 8 月 12 日)
7) 研川英征・後藤雅彦・大角光司・栗栖悠貴：自然災害伝承碑の情報公開, 日本地理学会発表要旨集, 2020s_132, 2020.
8) 高橋和雄・緒續英章：第 4 章 災害伝承「念仏講まんじゅう」, 災害伝承 命を守る地域の知恵, 古今書院, pp.83-110, 2014.
9) 藤本一雄：日本各地の石碑に刻まれた疫病流行の記憶, 地域安全学会梗概集, No.47, pp.5-8, 2020.